

〔行事報告〕

「流体若手夏の学校 2003 - 生物流体・微小流動 -」の報告

*名古屋大学大学院工学研究科 吉田 恭†

毎年「流体若手夏の学校」には、流体力学に関心を持つ大学院生からPD、助手などを中心とする若手研究者が20～30人参加しています。2名程度の講師による集中講義と若手研究者の研究発表が行われ、若手研究者同士の議論、情報交換、お互いに刺激を与えあう重要な機会となっています。

本年度の「流体若手夏の学校」は、去る2003年8月4日(月)から6日(水)の3日間、名古屋大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーのホールにおいて、日本流体力学会の後援で行われました。今回は「生物流体・微小流動」をテーマに選定し、河内啓二先生(東大・院・工)と後藤知伸先生(鳥取大・工)にご講演して頂きました。例年「夏の学校」は合宿形式で行っていましたが、今回は各参加者それぞれに宿をとって頂くという形を探りました。参加者数は、講師の先生、今回運営に当たった名古屋大学の運営スタッフを含めて、教授:1名、助教授:3名、講師:1名、助手:5名、研究員:2名、大学院生(博士課程):4名、大学院生(修士課程):13名、研究生:1名、学部生:1名、その他:2名の33名でした。参加者の研究分野も、生物流体、乱流、波動、カオス、安定性、最適制御、経済動学など多岐にわたりました。

初日の午後、後藤先生には「微生物の運動～流体力学視点から」という題で、微生物の鞭毛運動、繊毛運動に関して、生物学、抵抗力理論・細長物体理論による低レイノルズ数流れの理論解析、数値シミュレーション、実験それぞれの立場から3時間にわたって講義して頂きました。2日目の午後は、河内先生に「羽ばたき翼のメカニズム」と

題して、高レイノルズ数流れに適用される定常翼理論のレビューから、昆虫などの羽ばたき翼に関する最先端の話題まで、高速度カメラで捉えた映像も交えて、4時間半にわたり講義して頂きました。両講義に対して数々の質問が出て、活発な議論が行われました。両講義とも生物流体という学際的分野の内容で、参加者からは、新しい可能性を感じた、広い視点からのアプローチの仕方を学ぶことができた、などのコメントを頂きました。



講義風景

2日目と3日目の午前中は、若手研究発表が行われ、自己紹介なども含めた自由形式で活発な議論が交わされました。懇親会や自由討論の場でも、参加者間の交流は夜遅くまで続けられました。

本年度の夏の学校もこのように盛況のうちに無事終了しました。最後に、興味深い講義をして下さった河内先生、後藤先生、そしてこの「夏の学校」を盛り上げて下さった参加者の皆様に深く感謝致します。

*〒464-8603 名古屋市千種区不老町

†E-mail: kyo@cse.nagoya-u.ac.jp